

段床による空間の再構築

—断面からみた「日本的空間」の再考—

Reconstruction of Space with Corrugated Floor
Rethinking 'Japanese Space' from Sectional Perspective

11823003

川端 瑛里

主査 篠原 聡子

教授

副査 片山 伸也

准教授 宮 晶子

准教授

日本人が培ってきた文化や伝統の伝承に対する声が上がりがちながらも、均質化されていく空間が増加する中、近年のなんとなく「日本らしい」というあいまいな表現や、そうした空間に対する人間の感性の低下に対して疑問を抱いてきた。人々が期待するステレオタイプの「記号」としての表層的な表現方法ではなく、空間として体感することで文化を感じるべきだと考え、本研究に着手した。日本的要素を分析する上で、日本建築において微少な段差の連続が空間を構成する上で重要な役割を持っていると考え、それを「段床」と名付け、焦点を当てる。数寄屋の茶室分析・分類を行い、その考察結果に基づき設計提案を行う。対象敷地は大田区羽田地域の首都高速神奈川一号横羽線の高架下とし、高さに規定がある敷地内で、断面方向の繊細な操作による提案を行うことで、「段床」の意味を空間化できると考えた。また更に、街を覆う巨大なインフラは街のコンテクストとは関係なく、近代に人工的につくられたものである。こういった場所を選定することで、そのコンテクストとして文化を表現できると考え、またその際に街のマテリアルを使用することで、その場所の個性を再構築する。

Keywords: Corrugated Floor, Japanese Culture, Space Division, Haneda, Hostel, Section

段床, 日本文化, 空間分割, 羽田, 宿泊施設, 断面

1. はじめに

1-1 研究背景

「日本の文化」というと何を思い浮かべるか。伝統的な茶室や着物、工芸といった、「和」的なものだろうか。あるいは、今日のアニメや渋谷のスクランブル交差点のような光景だろうか。日本人が培ってきた文化や伝統の伝承に対する声が上がりがちながらも、均質化されていく空間が増加する中、近年のなんとなく「日本らしい」というあいまいな表現といった、空間に対する人間の感性の低下に対して疑問を抱いてきた。

人々が期待するステレオタイプの建築における日本らしさや障子や格子、襖絵など「記号」として表層的に表現されているにすぎない現代の表現方法ではなく、日本において長く培われてきた日本的空間というものがあるなら、それは空間として体感されるべきだと考えた。その上で、「日本的」という言葉を現代におけるデザインツールにするために伝統的建築の再解釈を行い、そのツールを用いて意匠決定及び空間設計を行い、その空間にまちのマテリアルを使用することで真の現代日本を表現できるという考えの下、研究を図る。ここでは、あくまで和風の建築を提案したいのではなく、現代で変化しながらも引き継がれてきた空間構成要素や、またあるいは新し

い要素を抽出する。日本的要素を分析する上で、人の行為と空間の間の繊細な関係に焦点を当てる。日本の伝統的な建築の中でも、そうした特徴や仕上げの色濃いものである数寄屋建築の中でも茶室の分析を行い、分類を経て、その考察結果から設計提案を行う。

1-2 研究方法

本研究では、日本的要素とはどういったものがあるのか、文献調査を行う。また、その背景として日本人論を踏まえることで、その概念的部分がどのように発展してきたのかを整理する。その上で、数寄屋建築の中でも茶室の分析を行うことで、根源的な意匠の意味についての考察を行う。その結果から、日本的空間の再解釈を行い、実際の建築計画にフィードバックをもとに、現在における日本的空間の在り方を提案し、結論とする。

1-3 論文の構成

第一章では研究の背景と目的、構成について述べる。第二章では日本的空間の成立背景について述べる。第三章で数寄屋建築の分析を経て段床の考察を行う。第四章では、敷地背景や現状の調査を行い、第五章では、段床の再解釈による設計提案を行う。そして第六章を終章とし、結論・課題について提示する。

2. 日本的空間の成立背景

2-1 美意識の概念

日本人の美の概念において、中世以前は「きよら（清）」、中世以降には「わびさび」「粹」「教寄」「幽玄」などが挙げられる。また今日においては、「あいまい」という言葉が挙げられるが、ドナルド・キーン『日本人の美意識』では、日本人の美意識の概念において、日本語の「あいまい」性が「暗示・余情」を生じさせていると述べている。この「あいまい」というものが、これまでのような美の概念として使用されるのではなく、日本人の国民性や文化面等に見られる特徴的なものを示す概念として用いられることのほうが多い。しかし実際には、美意識を形成するにあたって文化的な側面は切っても切り離せない関係性にあり、それらによって発生するのである。水尾比呂志『東洋の美学』では、「日本の美意識の美至上主義は、自然に対する素朴で力強い信頼によって支えられ、日本人は自然を畏れるよりも親しむ関係を持つ。」と述べている。自然美に対する肯定からこの思想は生まれ、自然がなくては生まれなかったのであり、この基盤を持ちながら、その美意識の伝統を発展させてきたと考える。

2-2 風土性と日本人論

オギュスタン・ベルクの「空間の日本文化」では、ベルクは「日本文化における空間」を論じたのではなく、「空間を切り口にして日本文化について」を論じている。ベルクが「空間」という言葉を用いている対象概念を整理すると、

1. 精神的な領域（心理学や言語学の研究領域）
2. 社会的な領域（社会学や文化人類学など）
3. 物質的な領域（建築学、都市工学など）

の3つになる。

精神的な領域では日本語と日本人の意識について考察がなされており、これらは日本語の言語構造からくる日本人の意識、つまり「主体を絶対化せず周囲環境との一体によって自分が表される」という特徴からくるものとしている。「主語なし文」などにおける日本語の特質はその「場」に依存する高コンテクストな働きを示し、人間の認知と密接に結びついたものであるといえる。篠原一男は、「日本語が母国語の建築家は、その方法がどれほど西欧的なものであっても、完成した空間は「日本的なるもの」が現れる。」と述べる。さらに榎文彦は、「言語と建築」について考察し、自分の空間感覚は日本の言語空間の中ではぐくまれてきたと述べている。空間の連続性や用途を定めない曖昧さ、あるいは、空虚な場所を設けることによって、その周縁に意味をもたせることを挙げている。

2つ目の社会的な領域では日本の「食」と「住」を取り巻く、いわゆる物理的な「空間」について考察が行われている。位相空間の設計原理としては、遠くまで開けて見通せるのではなく先が見えない事を良しとすることや、行程の途中に小さな区切りを設けることで眺望が見えないことを補完することが優先されている。予め決められたゴールを目指して空間設計が行われるのではないため、空間全体を統括するのはある場所から別の場所への動きを規定するルールだけであると述べられている。

最後の物質的な領域においては、今まで進めてきた精神的および物理的意味における「空間性」を踏まえ、社会的な考察が論じられる。ベルクは、日本社会は疑似家族的労使関係の中にあり集団指向

性が浸透した社会であるとし、その空間において象徴作用（ルール）が存在することを示唆している。

これらのことから、日本の知的風土や、社会的風土は「空間」に影響をもたらしているといえる。

2-3 概念としての「型」

日本の美意識の伝統において、「見立て」という、ひとつの枠組みで対象を捉える認識の仕方がある。現実にもそのものがなくても、そのつもりで認識するという一種の約束であって、日本文化は約束事が非常に大切な文化だという点で、重要な意味を持っていると考える。見立て、聞きなしの基本には前節で明記した、日本語の問題がある。日本語の音節や音数律によって言葉の表現をしていたという約束事を持ったことで、自然も住居空間も捉えようとする傾向があるのではないかと。「多様性と共通性」という意味では、日本的ということが非常に多様なものの複合形態を持っているとするならば、意識の共有という点から見れば共通性が高いいくつかの核があるのではないかと。つまり日本の空間の定義はないが、日本の空間は存在するということであるということである。他には、「有心」「無心」の両方を交互に置くことが詩歌において意識的になされていたり、「ハレ」と「ケ」の交錯による「寄り合い」のような、ひとつの空間を自由自在に、多目的に使用するということが自然に行われていたという意味で「二律背反」も挙げられる。西洋風の建物と日本風の建物が同じ屋敷の中につくられていたことや、床と座敷の共存、座る生活と椅子の生活の両方が使われていたり、居住空間の根幹にはそういった空間の重層性があったと考えられる。

空間構成における、空間の性質において「容器としての性質」と中心と周辺が発生しやすい「場としての性質」があるが、日本的な空間というのは、場としての性質が強い。そのため、境界もはっきりせず、部分も確立しない。日本の空間の特質には中心の概念ではなくむしろ「奥」の概念によって捉えられることを榎文彦が指摘していることから分かるように、足していくことと、引くのではなく捨てることという方法で構成されてきたということがいえる。

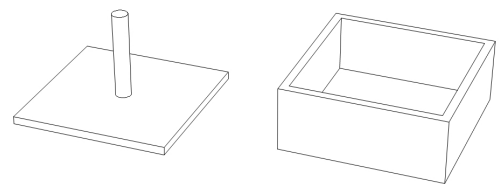


図1 場としての性質と容器としての性質

2-4 「日本的」の読み解き

明治以降今日に至るまでに、日本の伝統的な建築が重要なテーマだとみなされていた時期は数度あった。そのたびに、「日本的」というものが再解釈され、様々に表現がなされてきた。1回目は1909年の伊東忠太「建築進化論」から1916年の日清生命保険会社社屋コンペごろまでの時期、2回目はいわゆる「帝冠様式」を巡って議論が起こる1930年代、3回目は1950年代の「新日本調」小住宅出現から「伝統論争」へ至る時期である。そして、1970年代後半にあった4回目の議論では、三つの考え方に大きく分かれ、関心が再度生まれた。1つ目に黒川紀章を筆頭に、日本建築の部分を取り取りアイコンとして扱う、いわゆる、ポストモダニズムの脱文脈的な引用

という手法の対象が、日本建築にまで及んだもの。2 つ目に数寄屋に対する関心の高まり。3 つ目に篠原一男などによる、ミニマリズムを神道的な空間演出と重ね合わせたもののような、省略と暗示による象徴性の生成であった。

このように日本的空間との関わり方は様々だが、各時代で、このように取り上げ関心となってきた。日本的なものを追求していくと、その多様さが浮き彫りとなり、それらが説明的でないところに行きつくわけだが、言語化をしようとした時に、その軽薄さを感じながらも、結果としては各時代における日本的な空間は出来上がってきたのである。かつての伝統論の時代には、モダニズム的空間構成の上に日本の古典的建築からの直接的引用がなされた。それからモダニズムが崩壊し、外国人建築家の波が押し寄せ数十年を経た今日「日本的」ということを、問うことにまた意味のある時代になったと考える。しかしその日本的空間は、伝統論の時代のように必ずしも直接的でなく、全く異なる思考や手法によるものが多い。

具体的にインテリア空間を認識するにあたって、空間の構成以上に、床・天井・壁を構成するテクスチャーが影響している。日本の種類として、

1. 直接的な日本の材料・日本の手法の引用
2. 空間の質(シンプルさなど)空間の連結手法
3. 空間の輪郭が対象・定形でなく、特にフラクタル的なもの
4. 鉄・アルミニウムなど非伝統的材料を用いながらディテールの扱いなどで、木や紙に通じる軽やかさ、儂さを出しているもの
5. 材料そのものが非伝統的でありながら、木や紙のように滅びゆくもの、古びていくものなどの感覚を持っているもの(打放しコンクリートなど)

が挙げられると考えた。伝統論の時代に最も近いのは②であるが、実際にはかなり異なっていると言える。つまり、伝統論の時代には RC のスケルトンを木造的プロポーションで再現するといった手法、つまり構造に関わるものが中心であったのに対して、最近のものはより表層的で、ポストモダニズム的なものが多いといえる。

3. 段床について

3-1 高さの違いが持つ意味

日本の住居空間は、自然との関係で人間が一番原初的な関わりを持つ場なのではないかと考えるが、それには身体技法の関連がある。体の使い方は、歩き方ひとつとっても文化的に強く条件づけられたもので、住居空間はある意味では人間の体の使い方、立ち居ふるまいを造形する場であるからだ。特に履物を通しての床面との関わり方が住居において非常に重要だと考える。日本は地面に直接人間が触れるのではなく、一段高い床を設けてその床と人間が関わっている。その高床式で開放性のあることで、外と内の区別があって、内に入ることを「上がる」という感覚が日常化している。つまり、人間の、自然、建築との関わり合いで、接する面は床であり、体の使い方をも造形している重要な部分である。微小の段の連続性という意味で、視線は奥(水平)へ動くが、身体は垂直に移動している。日本人の空間認識において、それが平面的というよりは、レイヤーとして認識されており、そのシークエンスによって全体像をつかんでいると考える。菊竹清則が「床は空間を規定する」と言ったのはこうした理由があると考えられ、「床の設定」がその意匠の決定的

条件であるとしている建築の中には、1950 年代中頃の清水寺の舞台、高床の出雲大社、浮床の厳島神社と、これまで第二章で述べてきた日本人の歴史性にも通ずる。また、宇杉和夫は「日本住宅の空間学」で出雲大社の古代復元図において、堀口捨己によるものでも、現在の 3 倍以上の床の高さがあった(福山敏男によるものはそれ以上だが)ということが分かる。床の高さには意味があり、床の概念は高さをもたらす柱という概念に関連深いものであるということがいえる。以上より、この床による空間の操作が日本的空間においては重要な役割を占めていることから、この操作をとくに「段床」と命名し、デザインツールとする。

3-2 数寄屋 茶室の断面分析

前節より、「段床」の持つ意味や、床が文化を造形する上で重要な存在であることが明らかとなった。日本建築史基礎資料集の茶室を用い、ここに含まれている茶室すべての分析を行う。分析方法としては、それぞれ掲載してある断面図を用い、下記の通りに進めた。

1. 天井、床のラインをトレース
2. 天井・床の形状や高さが切り替わるところで空間を分け、その断面における空間の数
3. 庇空間の種類を下記 6 パターンに分類
 - A: 地面と踏み石の高さで二つに異なる
 - A': 複数の高さ空間がある
 - A'': 庇がそのまま内部まで伸びる
 - B: 踏み石がなく、外部が一つの空間
 - C: 建具の高さが異なる
 - D: その他
4. 屋根形状を 4 つに分類
5. 天井・床の形状変化(上がる、下がる、そのままの 3 パターンの天井・床の組み合わせ 9 パターン)の分類
6. 天井の高さの切り替えの数
7. 床の高さの切り替えの数
8. 地面から床の高さの数値
9. 床切り替え高さの最大値
10. 地面から軒までの高さの数値
11. 天井高の最大値、最小値(天井高が複数ある場合はそれも記載)
12. 天井切り替え高さの最大値

の 12 項目に分け、分類、及び分布の分析を行った。

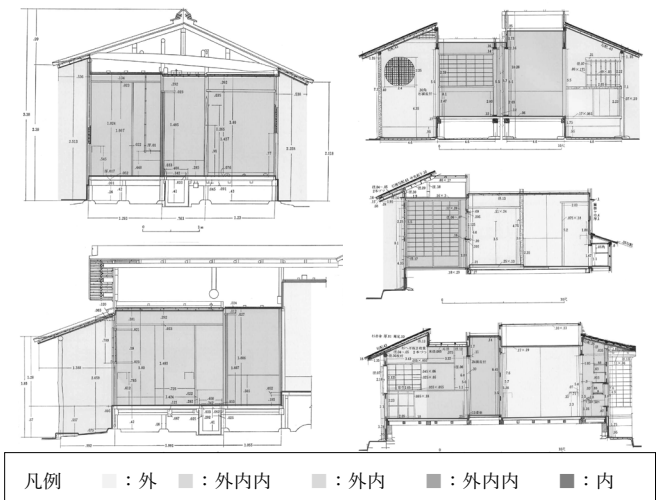


図 2 分析断面図(左図:待庵 右図:如庵)

3-3 数寄屋茶室の考察

前節の結果より、空間の性格付けを行った場合、「外」「外外内」「外内」「外内内」「内」という、微妙な違いをつけることが出来る。これらは物理的な内外の性質としてだけでなく、公私としての精神的な内外として、区別することが出来、それらを割り出された数値に当てはめることで、空間に意味を持たせることが出来ると考えた。数値の結果については、下記のとおりである。

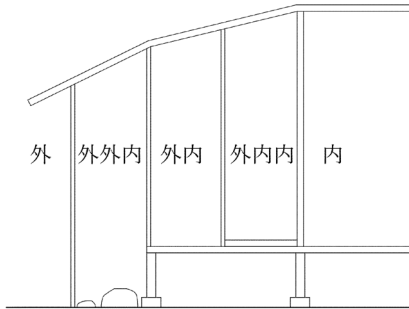


図3 内外関係図

表1 分析結果

天井高	床の高さ
①2612 mm (軒 AVE) <8.62 尺>	①710 mm <2.34 尺>
②2160 mm (MAX AVE) <7.13 尺>	②560 mm (AVE) <1.85 尺>
③1675 mm (MIN AVE) <5.53 尺>	③455 mm (MIN) <1.50 尺>
天井切り替え	床切り替え
①150 mm <0.50 尺>	①25 mm (MIN) <0.0825 尺>
②430 mm (AVE) <1.42 尺>	②105 mm (AVE) <0.3465 尺>
③1000 mm <3.3 尺>	③245 mm (MAX) <0.8085 尺>

それぞれ三つの数字は分布や最大値、最小値から導いたものであり、これらの数値を用いて設計提案を行う。

4. 敷地調査

4-1 敷地概要

前章までの考察を踏まえて、提案する空間を体験する対象者として外国人を取り上げたい。そのために、空港からの他の地へ繰り出す動線となる敷地として、大田区羽田地域を選定した。選定した大田区羽田地域は、羽田空港から京浜急行羽田空港線で羽田空港駅の次の停留所である、穴守稲荷駅・大鳥居駅を最寄り駅とする最初に通過する街である。2020年の東京オリンピックを控える中、増加し続けている外国人観光客を受け入れる「東京の玄関」として、まちの発展に期待が高まる場所である。

4-2 歴史的背景

羽田地域は漁師町としての顔と、町工場としての顔を持っていた。多摩川の河口に位置し、海水と淡水が混ざる場所であったことから漁業が盛んにおこなわれていた。しかし、東京飛行場の開港や東京湾の埋め立てが進んだことで、港湾整備のために漁業権を放棄してしまい、現在では、当時よりもはるかに小規模な漁が続けられている。また、大田区の一部として「切削」「成形」「メッキ」など、一加工に特化して請け負っている工場は羽田地域にも数多く存在した。工業の衰退や技術の発展の必要性に伴い、こちらも数多くの課題を抱えている。

4-3 まちのマテリアル

羽田地域における住宅の特徴は、床面積や屋根形式、家屋分類は

住宅毎によって異なるが、木造和小屋の構造、下見板貼あるいはトタン板貼の外壁、屋根葺材は葺瓦葺あるいはトタン葺であるという共通項目が挙げられた。この辺りでは漁業を生業としている人々が多く住んでいたが、その住まいでは冬は海苔、夏には魚を取って生計を立てていた。そのため漁家は海苔の作業場として広い土間を持ち、収穫した野菜を収納するために縁側のない土庇であった。また一方では多摩川の水運を利用して砂利の運搬を生業とする者もいた。多摩川の砂利採掘が産業として成立したのは明治以降のことで、鉄道・港湾・道路・橋梁など、基本資材としても使用され、住宅等の建築も例外ではなかった。またこの地区にたびたび訪れる洪水のための配慮として床高が90cmと一般住宅よりも高めに計画されていたことも特徴の一つとして挙げられる。

いずれの特徴も、近代化に伴ってその産業が衰退したことで現在ではみられることも非常に少なくなったが、この地域が培ってきた歴史を表すものである。

4-4 選定敷地概要

設計提案を行う敷地は大田区の羽田地域の首都高速神奈川一号横羽線の高架下で、地図に赤枠実線で示す通りの、敷地最北部に面する弁天橋通りから、多摩川の面する南側から約470m部分である。第三章より、床や天井の高さについての考察を行っており、高さの規定が既にある敷地を選定することで、その意味を深められると考えたため、この場所を選定した。また、まちを覆う、巨大なインフラはまちのコンテクストとは関係なく、近代に人工的につくられたものである。こういった場所を選定することで、そのコントラストとして文化を表現できると考えたためである。道路は、シームレスにまちを繋いでいくものであるため、まち全体に提案を浸透させていけると考える。最北部を弁天橋通りとしているのは、この通りの道路幅が約7.5mとなっており、そこで南北の敷地が分断されているためである。ここよりすぐ北には京浜急行線穴守稲荷駅や環八通りがあり、さらに南北を隔てる要因がある。



図4 全体図

4-5 敷地調査

高架下の敷地のため、昼間でも暗い。そのため、駐車場や公園として現在は利用されている。一通道路に囲まれているが、車の通りは多く、逆に人通りはあまり多くないように見受けられた。



図5 敷地写真(公園)

図6 敷地写真(駐車場)

5. 設計提案

5-1 計画概要

周辺の宿泊施設は穴守稲荷駅から1km圏内で16か所あり、そのうちホテルが10か所、ゲストハウスが4か所、ホステルは2か所である。しかし、対象敷地周辺は第一種住居地域でありながらも、木造密集地のおかげで1か所もない。幹線道路に近いエリアに立つそれらは、「宿泊する」というニーズにだけ対応し、ただ規模の大きい、また収容するだけの宿泊施設となっており、今後の宿泊産業に応える宿泊施設をつくる必要があると考えた。また、私たちは、普段この現実を日本の空間として意識することはない。時に外国人による指摘によってそれを知り意識するようになるので、対象者を外国人にすることで、日本的というものを見つめ直したい。



図7 宿泊施設分布図

5-2 宿泊施設の今後

宿泊施設は図のように3つの型に分けられると考える。今後のホテル産業において、現在ホテル建設はラッシュで、今後2、3年も続くと言われているが、今日開業するホテルには、宿泊施設としての枠を超えようとするケースが多く、コンセプトを持つ新しいホテルに流れつつある。すると、宿泊特化型のホテルはたちまち古いものとみなされるようになり、稼働率が下がる恐れがあり、やがて廃業に追い込まれるホテルも出てくる可能性がある。利用者が求める付加価値とは、地域性や体験を指すが、それらが単にモノやコトに置き換えられるのではなく、その土地ごとの空間特性を引き継いだものであるべきだと考える。

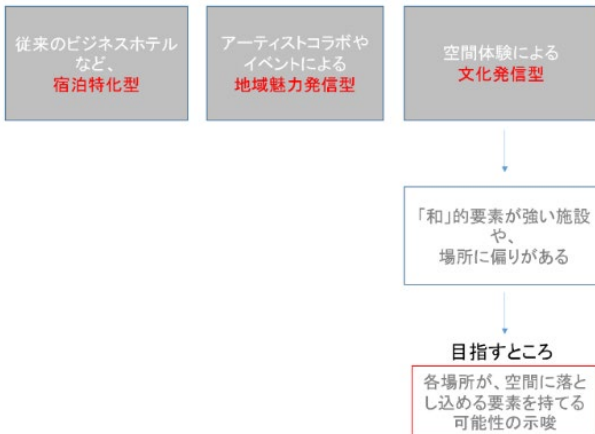


図8 宿泊施設の今後

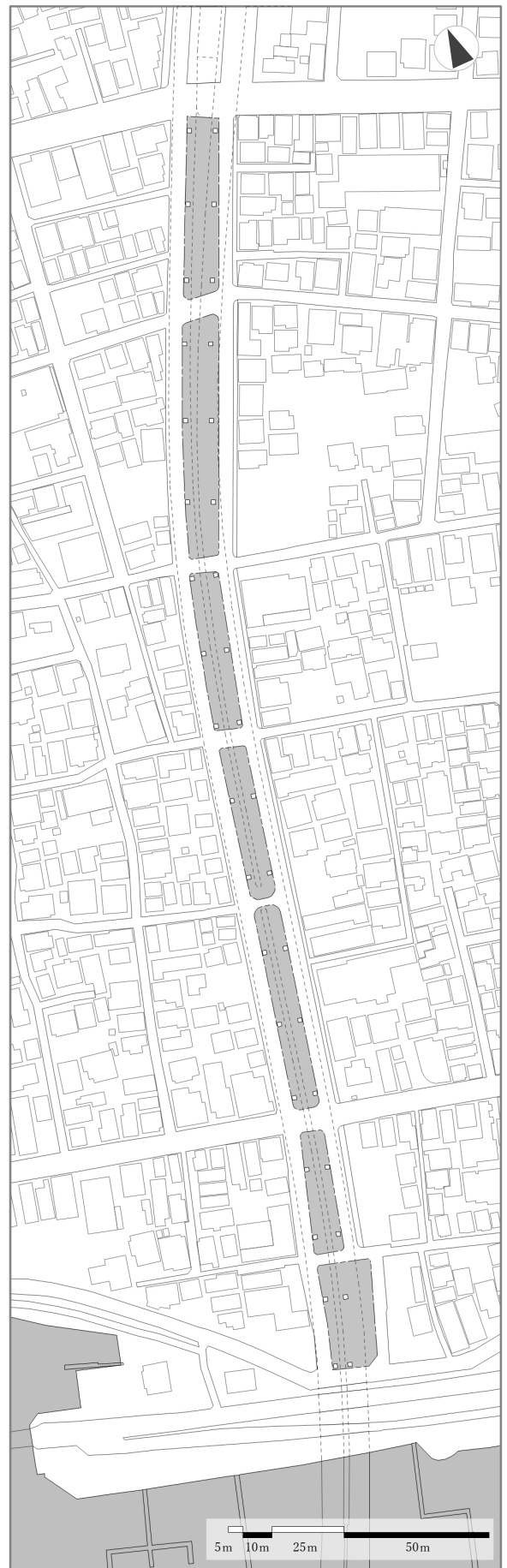


図9 全体敷地図

5-3 手法

2章の分析結果より、9つの数値を用いながら空間設計を行う。アクティビティの違いを、壁で仕切るのではなく、床・天井の高さの違いによって空間を分化していく。例えば、ホステルの個室は高さ1675mmに設定した。高さ方向の数値は数寄屋分析の際に出た数字から引用しており、最小限の個室空間にすることで、ここを利用する人々がなるべく他の空間で過ごすことを目的としている。このように、数値に意味を持たせていくことで設計を進めていく。

また、敷地調査で得られたまちのマテリアルを使用することで、このまちの個性を表現する。こうすることで、概念的なアプローチと物理的なアプローチを行う。

5-4 プログラム

直接的な「日本的なるもの」を表現するのではなく、谷崎潤一郎が陰影礼賛で間接的な陰影の美しさを語るような情緒的な建築空間の創造を目標に、ミニマルな宿泊施設を設計する。一棟貸しのゲストハウスや、客室の中だけで完結するようなホテルではなく、人々が接触しながらも独自の場所を見つけながら滞在できると同時に街に対して内外の関係をつくり出すホステルである。町家街や歴史的保存地区でない場所で行うことで、これからの地域の可能性を示唆できると考える。

ホステルを中心としながら、ここに泊まる人々や、周辺住民が少しずつ関わり合うために、飲食店や物販店舗などの商業空間や、既存の公園を再構築しながらマーケット空間となるオープンスペースを設計する。7つの島を利用しながら、人々の活動の疎密をつけることで、より、まちに溶け込むことを目的とする。

5-5 設計提案

設計をするにあたって、段床があることによって、境界の調整、プライバシーの調節、眺望の獲得、領域の分離、建築と自然の調和、通風の確保、周辺地域との融合など、様々な事象を生むことが出来る。ホステル内でも、個室と共用部の分化やつながり、また異なる部屋に移動する場合の拡がり感をもたらすことで、空間に強弱をつける。主な提案はホステルであるが、大通りに面する最北部と、多摩川に面する最南部については、市民とのつながりをもつ商業空間やオープンスペースを配置する。ホステル内での奥と段床の関係という「奥性」を付けながら、一方で大きい意味での、「奥性」をここでは示唆する。ここでは、奥は分散され、そうすることで、まちに対しての建築の強弱もつくつと考える。



図10 A-A' 断面パース

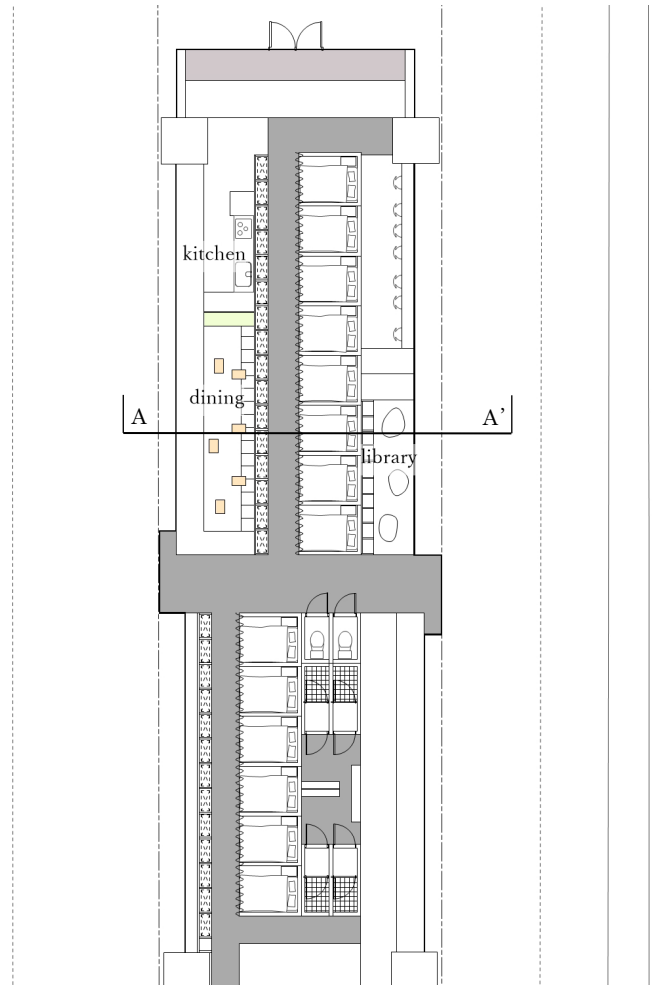


図11 ホステル図面

6. 結論・今後の展望

今日では「バリアフリー化」は進み、私たちの周りから段差がなくなっている。確かに、誰に対しても平等に機会が与えられるということや、快適性を求める中で、これらは有効な手段である。しかしその一方で、時代のニーズが変化することで、失われつつある文化というものがあるということを忘れてはならない。

本研究では、「段床」というツールを用いることで、日本的空間について再考してきた。この視点を基に、さらなる「日本的なるもの」の探求を進めていく。

参考文献

- 1) オギュスタン・ベルク 「空間の日本文化」 筑摩書店 1985年
- 2) 伊藤ていじ 「日本デザイン論」 鹿島出版社 1966年
- 3) 桜井邦朋 「日本人の知的風土」 祥伝社出版 2012年
- 4) 宇杉和夫 「日本住宅の空間学-〈ウラとオモテ〉〈ウチとソト〉のスペースオロジー-」 理工図書 1997年
- 5) 太田博太郎 責任編集/中村昌生 「日本建築史基礎資料集成 20 茶室」 中央公論美術出版 1974年
- 6) 大田区教育委員会 「大田区の文化財第27集 大田区の近代建築-住宅編1-」
- 7) 大田区ホームページ <https://www.city.ota.tokyo.jp/>

- 1) ドナルド・キーン 「日本人の美意識」 中公文庫 1999年4月18日
- 2) 水尾比呂志 「東洋の美学」 美術出版社 1963年
- 3) 谷崎潤一郎 「陰影礼賛」 中公文庫 1995年9月18日
- 4) 伊藤ていじ 「日本デザイン論」 SD選書 1966年
- 5) 神代雄一郎 「間(ま)・日本建築の意匠」 SD選書 1999年
- 6) 磯崎新 「見立ての手法」 鹿島出版社 1990年8月
- 7) 桜井邦朋 「日本人の知的風土」 祥伝社 2012年12月3日
- 8) 平尾和洋・青柳憲昌・山本直彦 「日本の建築意匠」 学芸出版社 2016年12月16日
- 9) ブルーノタウト 「日本美の再発見」 岩波書店 1939年6月28日
- 10) オギュスタン・ペルク 「空間の日本文化」 ちくま学芸文庫 1994年3月
- 11) 磯崎新 「建築における「日本的なもの」」 新潮社 2003年4月30日
- 12) 香山壽夫 「建築意匠講義」 東京大学出版会 1996年11月
- 13) 宇杉和夫 「日本住宅の空間学-〈ウラとオモテ〉〈ウチとソト〉のスペースオロジー-」 理工図書 1997年5月
- 14) 宮川英二 「風土と建築」 彰国社 1979年6月
- 15) 五十嵐太郎 「日本建築入門-近代と伝統-」 筑摩書房 2016年4月5日
- 16) 大田区教育委員会 「大田区の文化財第27集 大田区の近代建築-住宅編1-」
- 17) 建築雑誌 Vol.108 No.1342 1993年5月号
- 18) 太田博太郎 責任編集/中村昌生 「日本建築史基礎資料集成 20 茶室」 中央公論美術出版 1974年
- 19) 大田区産業経済部産業振興課(公財) 大田区産業振興協会 「大田区工業ガイド」 2016年
- 20) 大田区ホームページ <https://www.city.ota.tokyo.jp/> (2019年11月25日アクセス)

梗概のページ数：6ページから8ページまでとする。

本文の書体

和文：MS明朝、章節の表題はMSゴシック／文字の大きさ8pt、原則として、2段組み：1行30字、段間2字(6mm)、行間14pt 50行、1頁(30文字×50行×2段=3,000字詰)、余白 上20mm 下30mm 左右15mm。

2. タイトル・著者名・英文要旨・キーワードについて

和文タイトルを先に、その下行に英文タイトルを記載してください。

- ① 先のタイトル 14pt MS明朝 英数はCentury 英文の場合はすべて大文字／サブタイトル 10.5pt MS明朝 英数はCentury 中央揃え。英文の場合は最初の1語のみキャピタルラージとしています。
- ② 下行のタイトル 10.5pt MS明朝 英数はCentury 英文の場合はすべて大文字／サブタイトル 9pt MS明朝 英数はCentury 中央揃え。英文の場合は最初の1語のみキャピタル

ージとしています。

- ③ 学籍番号・著者名 10.5pt MS明朝 欄内に中央揃え
- ④ 主査 10.5pt MS明朝 欄内に左揃え 肩書きを左揃え
- ⑤ 副査 10.5pt MS明朝 欄内に左揃え 肩書きを左揃え
- ⑤ 日本語要約：MS明朝 8pt 行間1行(14pt相当)
論文の内容の主要な点を500文字程度に簡潔にまとめ、本文の前に添える。既定のテキストボックスのサイズを変更せずに、その中に納まる程度の分量とする。
- ⑥ **Keywords:** の見出しは9pt Times New Roman Italic Bold としてください。
- ⑦ 英文キーワードは8pt Times New Roman Italic 行間1行(14pt相当) 左右インデント 各4字 中央揃え。
- ⑧ 和文キーワードは8pt MS明朝 行間1行(14pt相当) 左右インデント 各2字 中央揃え。

3. 見出し

- (1) 見出しは8pt MSゴシック

4. 表について

表番および表題はMSゴシックとする。

表と本文の間は1行空け中央揃え

※表題は、表の上に罫なしのセルを作りその中に入れると、表と表題がバラバラになりません。

1行アキ

表1 調査概要

調査対象	所在地	建物形態	調査方法	調査日
A	中央区	RC造10F	ヒアリング	2017.4.20
B	千代田区	S造5F	視察	2017.4.20
C	豊島区	SRC造15F	ヒアリング	2017.4.20

1行アキ

5. 図について

図番および図題はMSゴシック

本文と図の間は1行空け中央揃え

6. 写真について

写番および写題はMSゴシック

写真と本文の間は1行空け中央揃え

参考文献

- 1) 参考文献 表題は7pt MSゴシック(英文はArial)
上1行アキ
- 2) 参考文献の文字の大きさは7pt MS明朝(英文はCentury) 行間10.5pt 複数行は1字下げてください。番号は片カッコ付きで数字は半角にしてください。

注

注 1)注表題は 7pt MS ゴシック(英文は Arial) 上1行アキ

注 2)注の文字の大きさは 7pt MS 明朝(英文は Century) 行間 10.5pt

複数行は1字下げてください。番号は片カッコ付きで数字は半角にしてください。